特 260
231

菅原時保著

飼養法講話 (第二十版)

貸出

特 200
231

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十六）

特260
231

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十六）

昭和四十五年
文部省
図書
検査

碧巖錄講演 其二十六 目次

第七十四則　金牛飯桶……一頁
第七十五則　烏臼屈棒屈棒……二一頁
第七十六則　丹霞喫飯也未……四五頁

碧巖錄提講

第七十四則　金牛飯桶

◎垂示

垂示云、鏌鋣横按、鋒前剪斷葛藤窠、明鏡高懸、句中引出毘盧印、田地穩密處、着衣喫飯、神通遊戯處、如何湊泊、還委悉麼、看取下文、

讀方

垂示に云く、鏌鋣横に按ずれば、鋒前に葛藤窠を剪斷し、明鏡高く懸れば、句中に毘盧印を引出せん。田地穩密の處、着

衣喫飯、神通遊戯の處、如何にしてか湊泊せん。還た委悉すや。下文を看取せよ。」

字解。

鏌鋣、』支那の名劍、日本の正宗の如し。

横按、』刀の構へかた。横は自由自在の意。——

鋒前、』其の場、即座と見るべし。

葛藤窠、』文字言句。相對的の産物。——

句中、』井上君の説には明鏡の放射する屈折光中と云うてをらるゝが、——敢へて明鏡にかけず、自己神靈の活動中でも妨げなし。

毘盧印、』毘盧舍那佛を略したる語。譯して光明遍照と云ふ。要するに自己本具の佛性又は法身と見るべし。——田地穩密處、』悟境の淨地。田地は心田の意味。——神通遊戯處、』穩密の處に居して着衣喫飯等は總て神通遊戯である。——神通につき一言老婆しておきませう。

經文に六神通がある。

一、天眼通　宇宙の事象を透觀する心眼。

二、天耳通　宇宙一切の音聲を聽取する心耳。

三、他心通　自由自在に他人の心中を透觀する心力。

四、宿命通　經過せし事實を識得する靈用。

五、神足通　空間を自由自在に飛行する妙動。
六、漏盡通　一切の煩惱を斷盡し三界超越。
湊泊、」到着、到達。――
分解。
鏌鋣云々の二句は宗師家たる人の機鋒嶮峻にして點滴も施與せざる處を云ふ。
明鏡云々の二句は宗師家たる人の見地明白を示す。田地穩密云々の二句は敢へて宗師家に限らず、大悟底の境界を述べたのである。
神通遊戯處、これは其の人にして始めて知るべし。其の人にあらざる者の如何ともなし得ざる樣子を語りしものなり。

提講。
名實相應したる宗師家であるならば、常に鏌鋣の寶劍を手にし、如何なる難問題に遭遇しても、間に髮を入れず即時即處に於て、美事に剪斷し公平に解決をなすことが出來る。（學者に對しては無論のこと。）それのみならず、心眼の明鏡より放出する靈光は悉く毘盧舍那佛そのものである。故に如何なる處と雖も照破せざるなし。（學者の胸中、一見辨見。）以上を利他とすれば田地穩密以下は自利。自利、これを唯自とも云ふ。唯自の場合は、一擧一動、着衣喫飯、それらの總てが神通妙用の活動で

あり活遊戯である。斯くの如く超人的なるは尋常の人の湊泊なしがたき處。此のなしがたき穩密の田地に如何にして到達すべきや。それは本則を參究して要處を徹見するより外はない。看取下文。――

◎本則

舉、金牛和尚、毎至齋時、自將飯桶、於僧堂前作舞、呵々大笑云、菩薩子喫飯來、』雪竇云、雖然如此、金牛不是好心、』僧問長慶、古人道、菩薩子喫飯來、意旨如何、慶云、大似因齋慶讃、』

讀方

舉す。金牛和尚、齋時に至る毎に自ら飯桶を將つて僧堂の前に於て舞を作し、呵々大笑して云く、「菩薩子喫飯來。」と。(雪竇云く、「然も此の如くなりと雖も、金牛是れ好心にあらず。」)僧、長慶に問ふ、「古人道く、菩薩子喫飯來と。意旨如何。」慶云く、「大いに齋に因つて慶讃するに似たり。」

字解。

金牛和尚、』馬祖道一禪師の弟子、鎭州の人。鎭州は大根の名産地。趙州禪師、僧に答へて曰く、鎭州に大蘿蔔頭を出す、と。以て知るべし。此の金牛和尚、自費を以て飯を支度し、僧侶を供養なされた。故に或本に、自作飯供養衆僧、とあります。寺

に莫大の不動産があつたか、又は自己が莫大の資産を所持してをられたか、其の點は不明である。或人の說に依ると、よほどの財産家、何事にも不自由なき身の上、然るに斯くなされしは、何か特殊の動機によつて出家し、衆僧に供養するを以て自ら滿足して居られたらしい、と。――――因に云ふ、本則に出て居る金牛、長慶、雪竇、何れも同時代の人ではない。以上三人の年代を比較して見ると左の如しである。金牛和尙と長慶慧稜の間凡そ六十六年、長慶と雪竇の間凡そ四十八年、と聞いて居ります。

齋時、』午時の食、今日の正十二時に當ります。此の齋につき

知りおくべき理由があるが、今は略します。

呵々大笑、』滿足、喜悅、無我の心情を表したるもの。嘲笑や馬鹿笑ひでなきことを承知ありたし。

菩薩子、』此の子は孔子や孟子の師に通ずる子でなく、今日、女の名を花子とか、好子とか云ふ、それに相當したる意味に見るべし。故に親愛の言葉である。

喫飯來、』御飯をおあがりなさい。――――

好心、』善意と同樣。頭に不の字があるから不善意である。

（是は雪竇禪師の意見。）

因齋慶讃、』食時に捧げる感謝の祈禱である。現に禪僧は食

時の場合必ず五觀の偈を唱ふ。五觀とは、

一つには、計功多少、量彼來處、

二つには、忖己德行全闕應供、

三つには、防心離過貪等爲宗、

四つには、正事良藥爲療形枯、

五つには、爲成道業應受此食、

以上であります。まだ二三ありますが、省略します。

提講。

井上君、注意して云く、「大抵の禪僧は金牛和尙の作舞呵々大笑を一種の狂人的動作であるかの如くに誤解し、それを以て此

の則の眞髓である樣に思うて居るが、それは大なる目的違ひである。」と。衲が云はんと欲する處を先鞭し以て誤解の禪僧に一針を與へ下されたは實に有難い。―― 此の公案の着眼點は衆僧に供養し以て飽滿自足して居らるゝ非凡の人格行爲にある。――

「欲深き人の心と降る雪は、積るにつけて道を忘るゝ。」で、無ければ無論のこと、有れば又有るが上にも欲が出て、無暗矢鱈に欲を增長させるものである。

然るに金牛和尙の如きは多くの雲水僧を自分の寺に安居させ、自分で食物一切を調へ、食時に自ら飯桶を抱へて僧堂前に

行き、「サァ〳〵佛様のお子供衆、飯が出來た。おあがり〳〵。」と手の舞ひ足の踏むを忘るゝほど、喜色滿面に呵々大笑さるゝ。實に超人的の所作である。今時の人の遠く及ぶ處にあらず。敬すべし仰ぐべし。――茲へ圜悟禪師、下語して曰く、「醍醐毒藥一時に行ず。」と。これは圜悟禪師の喫飯來である。「垂示に、鏌鋣横按、鋒前剪斷葛藤窠、とは此のことであるぞ。ウカ〳〵金牛和尚の呈供された飯を頂戴しようものなら、所謂飯裏に砂ありだ。」と。それは其の人其の人に依りけりで、敢へて悪意にとる必要はない。圜悟禪師の飯は強い。――衲であるなら、「これは〳〵お志有難う。然らば遠慮なく頂戴致します。」と云

うて喫します。處が雪竇禪師、何と思はれたか、「大衆油斷すまいぞ。金牛和尚の腹を忖度するに決して好心ではない。」と御注意。」――井上君の言葉が面白い。「下宿屋のおかみさんの甘い口にだまされるな。物價騰貴の前提で、直ぐに下宿料の値上と來るぞ。」と。苟も穩密の處に到達したる人であれば、夢にも左樣な野心はある筈なし。然るに斯く云はるゝには雪竇禪師の胸中、別に仔細のあることならん。或はこれが雪竇禪師の御供養かも知れぬ。――（雪竇禪師の飯も強い。）

或僧が金牛和尚の歴史を見て、一日長慶禪師に向つて、「昔、金牛和尚と云ふ人が、自分の寺に修行して居る雲水僧に、菩薩

子喫飯來と云うて、自分で食物を調理して供養なされた、と云ふことがあります。如何なる心でなされたのでありませう。」と問うた。すると長慶禪師は、「あれは金牛和尚の食時の感謝祈禱である。平たく云へば御飯を頂くときの禮儀である。」と輕く答へられた。圜悟禪師の下語に、相席打令、とある。「如何にも長慶禪師は人を見て法を說かるゝ。」と。衲は「圜悟禪師も流石は神通遊戲自在である、相席打令。」と申しておく。――「朝夕の飯は强し柔かし、思ふやうには焚けぬものなり。」――

◎頌

白雲影裏笑呵々、　兩手持來付與他、　若是金毛獅子子、　三千

里外見誚訛、

讀　方

白雲影裏に笑呵々。兩手に持ち來つて他に付與せり。若し是れ金毛の獅子子ならば、三千里外に誚訛を見ん。

字解。

白雲影裏、金牛和尚の塵俗を脫出してをる樣子。世外の偉人と見るべし。

兩手持來、金牛和尚が飯桶を持し來つて菩薩子喫飯來と云うた實際を吟じたものなり。敢へて邪說を入るゝ勿れ。

若是金毛、明眼の衲僧に喩へた。有力の大人。――

三千里外』遠方のこと。――
見諸訛』言語上の誤謬を見出すこと。總ての動作を勘破するでもよし。

提講。

大内君は、「白雲とは飯桶に飯を高く盛りあげた形容とも見るべし。」と云はるゝが、如何にも形容が白雲でトリトメがない。』

――故宗演師は、「山の頂か、さては空中か、白雲深くして何處とも見分け難いが、其の白雲深き中から。」と云はるゝ。是れも雲深くして處を知らず、で、夢に夢見しこゝちがする。』

井上君は、「塵俗欲望を離れてしまつて居る彼の境界は實にうらやましい。その動作を詩的に表現したものである。」と云はるゝ。「以上三人の御意見の中で、雪竇禪師の意を得たる人は蓋し井上君ならん。」と衲は思ふ。故に衲は井上君の意見に共鳴して左に老婆口を弄します。

金牛和尚の境界は到底凡人の及ぶ所にあらず。一言以て是を云へば高歩毘盧頂不禀釋迦文――而して法々不隱藏、古今常顯露で、自ら飯をたき、自らそれを持し、雲水僧に向つて、「サァ〳〵菩薩子、おあがり〳〵。」どうです此の頭々無取捨處々絶疎親の有様は。慈母が子に對する以上の親切である。金牛和尚の胸中、さぞ欣快のことであらう。』流石は雪竇禪師だ。

白雲影裏笑呵々、兩手持來付與他、と頌じられたは實に吟じ得て妙々である。』圜悟禪師は笑呵々の處へ、笑中有刀、と下言された。其の意は、油斷のならぬ笑ひ方だぞ、と。豈金牛和尚に寸毫の邪意あらんや。刀は金牛の笑中にあらずして圜悟の句中にあるぞ。これこそ油斷はならぬ。』――圜悟禪師は又、付與他、と云ふ處へ、若是本分衲僧、不喫這般茶飯、と。圜悟禪師自ら本分の衲僧を氣取つてござる。――衲ならば下さるものは夏も小袖。況んや齋時に於てをや。空腹でありますから折角の御厚意有難く頂戴致します、と云うて十二分に供養を受けます。』瘦我慢をして、美食飽人の喫に當らず、なぞとは云はぬ。

若是金毛云々の二句、所謂本分の衲僧であるならば、金牛和尚の飯桶を持ち出さゞる以前に、金牛和尚の胸中を勘破するであらう。

三千里とは飯桶を持ち出さゞる以前のこと。』見諸訛とは合點しがたき處を勘破すること。

轉結の二句は、夫子自ら云ふ、で、雪竇禪師、「拙僧ならば金牛和尚の飯桶を持ち出さゞる以前に和尚の心中を洞觀し了れりだ。」と。聊か自畫自賛の妨なき能はず。されど茲に跳出生死關、驀過荆棘林、と云ふ深意のあることを見のがしてはならぬ。

或人は、「鎭州を距ること三千里も遠方の明州に居て（雪竇禪師）、金牛和尙の人格を批判し評價することが出來る。それを吟じて、若是金毛獅子子、三千里外見訑訛、と云はれた、と。或は然らん。參考に添へておきます。」諸君、金牛和尙の御供養を腹十分に頂戴なされましたか。一飽萬劫の飢を消しなさい。――

（昭和十四年十二月九日講演）

第七十五則　烏臼屈棒屈棒

◎垂示

垂示云、靈鋒寶劍、常露現前、亦能殺人亦能活人、在彼在此、同得同失、若要提持、一任提持、若要平展、一任平展、且道、不落賓主、不拘回互時如何、試擧看、」

讀方

垂示に云く、靈鋒の寶劍、常に前に露現すれば、亦能く人を殺し、亦能く人を活かす。彼に在るも此に在るも、同得同失。若し提持せんと要せば、提持するに一任し、若し平展せんと

要せば、平展するに一任せん。且く道へ、賓主に落ちず、回互に拘らざる時、如何にせん。試みに擧す看よ。』

字解。

常露現前、』常に前に露現すれば、と云ふ意である。

在彼在此、同得同失、』如何なる處に居ても殺活自在である。

——得失は殺活の換へ言葉と見るべし。

一任提持、』一任は他人に對することもあるが、茲では、自己の意のまゝに、と云ふ意味にとるべし。提持は把住の義、

——自己の適意。——

平展、』放行の意。——

不落賓主、不拘回互、』此の二句は

所謂無我の爭ひ。故に必ず賓位に立たうの主位に居らうのと我意我見を張らず、賓位に立つべき時は賓位に、主席に居るべき時は主席に、以上の意を不拘回互とも云ふ。——

提講。

靈鋒寶劍とは如何なる劍ぞ。金剛王寶劍のことである。其の金剛王寶劍とは如何なる劍ぞ。人々本具の般若の名劍そのものである。之是の般若の名劍は何人と雖も所持せざるなし。』されど多くの人は所謂寶の持ち腐りで、錬磨せざるが爲に折角の名劍も赤錆となつてをる。』苟も禪僧たるものはそれではすまぬ。眞箇の禪僧となり、本具の寶劍、それを常に所持し、否、

そのものそれになり、殺すも活かすも時と處と人とを選ばず、乾坤唯一人となり、自由自在に、或時は把住、或時は放行、心のまゝに――――なすことが出來ねば、名は禪僧と云ふと雖も眞箇の禪僧にあらず。（現今は名ありて其の實なき禪僧が多い。）幸に名實相應の禪僧であらば、賓主に落ちず、回互に拘はらず。如何に日々夜々行動なすべきや。その手本を試みに擧す。氣を靜止して親切に看るべし。』以上は圜悟禪師、月並の御垂示。別に珍重するほどの事はないが、その親切爲人の所は有難く拜受すべきである。

◎本則

擧、僧從定州和尙會裏來、到烏臼、烏臼問、定州法道何以這裏、僧云、不別、臼曰、若不別、更轉彼中去、便打、僧云、棒頭有眼、不得草々打人、臼曰、今日打着一箇也、又打三下、僧便出去、臼曰、屈棒元來有人喫在、僧轉身云、爭奈杓柄在和尙手裏、臼曰、汝若要、山僧回與汝、僧近前奪臼手中棒、打臼三下、臼曰、屈棒々々、僧云、有人喫在、臼曰、草々打着箇漢、僧便禮拜、臼曰、和尙却恁麼去也、僧大笑而出、臼曰、消得恁麼、消得恁麼、』

讀方

擧す。僧、定州和尙の會裏より來り、烏臼に到れり。烏臼問

ふ、「定州の法道は這裏と何似。」僧云く、「別ならず。」白曰く、「若し別ならずんば、更に彼の中に轉じ去れ。」便ち打つ。僧云く、「棒頭に眼有らば草々に人を打つことを得ざれ。」白曰く、「今日一箇を打着したるなり。」又打つこと三下。僧便ち出で去れり。白曰く、「屈棒元來人の喫在する有りたり。」僧、身を轉じて云く、「爭奈せん杓柄和尚の手裏に在ることを。」白曰く、「汝若し要せば、山僧、汝に回與せん。」僧、近前して白の手中の棒を奪ひ、白を打つこと三下したり。白曰く、「屈棒々々。」僧云く、「人の喫在する有りたり。」白曰く、「草々に箇の漢を打着したり。」僧、便ち禮拜せり。白曰く、「和尚、却て恁麼にし去るにや。」僧、大笑して出でたり。白曰く、「消得恁麼、消得恁麼。」

字解。

定州和尚、」定州石藏のことである。傳記不明。

烏臼、』地名。此の人は常に棒を以て接化さるゝ、と或本に出てをる。傳記不明。

會裏、』僧堂、禪堂、又は僧園。

法道、』佛法禪道。

棒頭有眼、』棒の頭に眼があるならば。

不得草々打人、』無暗に人を打つてはならぬ。

打着一箇也、」平生は無駄打ちであつたが、今日始めて手答へがあつた。

屈棒、」或人は、是非を論ぜず無理打ちにする棒なり、と。或人は、だしぬけに人を打つことである、と。以上二説ある。衲は後説を採る。

元來、」最初から、或は、いきなり、と見るべし。

杓柄、」棒のこと。

箇漢、」茲では烏臼自己自身を云ふ。

消得恁麽、」それだけかく〳〵。

提講。

或日一人の雲水僧が定州和尚の僧堂から烏臼和尚の處へやつて來た。烏臼和尚、來參の僧に向つて寶劍の靈鋒を現前して曰く、「定州和尚の處では如何に靈鋒を振り廻して御座る。(禪機禪風其の擧揚底、) 拙僧の方と多少變つた處があるか。這裏と何似。」――此の這裏と何似と云ふ一言、探竿影草、問僧の力量如何と試むるもので、所謂言中に響あり、容易の看をなすべからず。』圓悟禪師は烏臼に向つて、太煞瞞人。』定州の宗風と這裏の禪機と相違があるか、どうだ、なぞと問はるゝは甚だ以て人を馬鹿にした云ひ方だ。君子は千里同風、――とは云ふものゝ、處變れば品變る。此の僧、盲目僧にあらず、一隻眼を具する底の

活漢。云く、「別ならず。何れも同じことであります。」何が同じ。眼横鼻直か、柳暗花明か、喫茶喫飯か、――行雲流水か。――然り然り。いづこも同じ秋の夕暮。烏臼和尚を一口に呑却した。之是は僧の靈鋒現前。圜悟禪師、此の僧を托上して、死中に活底あり、と。されど實地を踏著せよ、と抑下した。白曰く、「若不別更轉彼中去。」便打。』「何れも同じことなら、別に拙僧の處へ來る必要はない。サツサと定州に歸れ。」と云ひつゝピシヤツとなぐつた。圜悟禪師は、正令當行。さうなければならぬ、玆で一手ゆるしたら靈鋒のサビだ、と。――活漢、一棒位で心を動かす樣な月並僧ではない。云く、「棒頭有眼、不得草々打人。棒頭に眼があるならば打つべき時に打つも可なり。その樣に麁相つかしく盲目打をなさる棒は頂戴しても有難く御座らん。」圜悟禪師、「却是獅子兒。烏臼和尚より一枚上だ。作家々々。」と兩手を擧げての喝采。强を壓へて弱を助くる底。――白曰く、「今日打着一箇也。」又打三下。』「永い間、打つたが、是ほどの者は一人もなかつた。今日と云ふ今日は如何なる吉日か、始めて打ち心地の好い奴を打ちのめした。嗚呼、愉快々々。」と云ひながら更に打つこと三下。流石、烏臼和尚だ。靈鋒常露、殺活自在。――僧便出去。』僧は第二の試驗に逢うて、一言のお禮も云はずにサツサと出で去る。此の僧、烏臼和

尙の手元が大體わかつたから、出で去ると共に烏臼和尙なんとするかと思ふ釣出しの心多少なきにしもあらず。――圜悟禪師は、「機を見てなす處を見れば、此の僧元來屋裏の人で、他人ではない。」と云はるゝが、棒の食ひ逃げを見ると或は屋裏の人でないかも知れぬ。或は深き軍略があつてのことか。――

僧の出で去りしを見て、烏臼曰く、「屈棒元來有人喫在」。」と。「嗚呼世の中には隨分馬鹿なヤツもあつたものだ。盲目棒で打たれて其のまゝノソ〳〵出て行くとは如何にも氣慨のなきヤツだ。」と暗に僧の再來せんことを催した。

茲に烏臼和尙の放去收來と云ふ禪機が流露してをる。見る人は見るべし。知る人は知るべし。熊谷に招かれた敦盛、是非とも馬の首を回らさざるを得ず。僧轉身云、「爭奈杓柄在和尙手裏」。何と申しても貴方が主位に立つて棒を所持して居らるゝから、外の者は手の出し樣がありません。」如何にも僧の云はるゝ如く、何者でも主位に立てば他の者は皆其の賓位に立つて服從しなければならぬ。時の天下に日の奉行、泣く兒と地頭には勝たれぬ。――第二の試驗に落第した、と思うたは思うた人の錯誤。實に烏臼和尙の手元を再驗せんが爲であつた。故に圜悟禪師、下言して曰く、「怜悧衲僧。」と。轉身した處に、云ふに云はれぬ力がある。（賓位を轉じて主位となす。）臼曰く、「汝若要、

山僧回與汝。貴公が主位に立たうと云ふなら、此の棒をやるからやつて見よ。」所謂打爺の拳。玆の處が垂示にある賓主に落ちず回互に拘はらざる所である。學者、高く眼を着くべし。

圜悟禪師曰く、「阿誰是君、阿誰是臣。」と。君も君に止らず、臣も臣に止らず。嚴子陵が光武帝の腹の上へ脚を載せたと同一の看をなす勿れ。決して客星帝座を侵したのではない。——

烏臼和尚の汝に回與せんと云ふ處へ、圜悟禪師、注意して曰く、「敢向虎口裏横身。僧に棒をわたすは誠に危險だ。」常情を以て心配さるゝが、心配御無用。烏臼和尚には烏臼和尚の腹がある。一任せよ、烏臼和尚のなすまゝに。——僧近前奪白手中棒、

打白三下。」主位に立てば何人でも斯くの如し。圜悟禪師、脗口を弄して曰く、「也是一箇。さきに烏臼、此の僧を打つて今日一箇を打着す、と云うて喜んだが、今度は此の僧が烏臼を打つて今日一箇を打着すと云うて喜んだかも知れぬ。」と。圜悟禪師は一休禪師に勝る即今禪の活轉家である。——

白曰く、「屈棒々々。」盲目棒だ、盲目棒だ。賓位徹底。——主位の影も嗅もない。烏臼なるかな烏臼。——烏臼にあらざれば斯く主賓を轉換することは出來ぬ。——

僧云く、「有人喫在。」お山の大將、我獨りだ。此の棒を喫する人があるから愉快だ。絶快でたまらない。——

白曰く、「草々打着箇漢。」第三の試驗、貴公は仲々やりてだ。それとも知らずに拙僧が屈棒を與へたのは實に草々であつた。之是を陷虎の機と云ふ。ウツカリすると一口だぞ。――

僧便禮拜。」賓位に早變り。此の僧の轉身自在底、見るべし。さきに烏白の棒を奪うて打つこと三下。今は殊勝に禮拜。圜悟禪師此の僧を賞讃して曰く、「危きに臨んで變ぜず、方に是れ丈夫兒。」と。過言にあらず。

白曰く、「和尚却恁麽去也。」それでモウお歸りか。――是れぞ言中に響ありだ。何か忘れものはなきか。――圜悟禪師は烏白和尚の胸中を知りて、點、と下言した。そこだ〳〵。痒い處へ手が屆いた。――

僧大笑而出。賓主に落ちず回互に拘はらず、逆順縱横、其の自在、其の自由、決して龍頭蛇尾にあらず。虎に似て雙角多く、牛の如くにして巴尾を缺く。――圜悟禪師は、「作家の禪客、天然の在るなり。」と。又曰く、「天下の人摸索不著。」と。烏白和尚の旗下に降る雜卒ではない。――

白曰く、「消得恁麽、消得恁麽。」それだけか〳〵。或人は、さうぢや〳〵出かした〳〵。何れにせよ、烏白はどこまでも老大和尚の立場に大座してをらるゝ。されど、勝敗は無し。君向瀟湘、我向秦。是で此の則は終了。」

◎頌

呼即易、遣即難、互換機鋒子細看、劫石固來猶可壞、滄溟深處立須乾、烏臼老、烏臼老、幾何般與他杓柄太無端。』

讀方

呼ぶことは即ち易く、遣はすことは即ち難し。互換の機鋒子細に看よ。劫石固うし來るも猶壞すべし。滄溟深き處に立つも須く乾くべし。烏臼老、烏臼老。幾何般ぞ、他に杓柄を與へしことの太だ端なかりきは。』

字解。

呼、即、易、遣、即、難、』此の二句、一句は把住の易きを云ひ、一句は放行の難きを云ふ。――此の二句の意は、蛇を捕へ又放つ、それに譬喩したものである。

井上君の說に、「日本の蛇捕は、ある特殊の物質を燃燒し、その臭氣を以て蟄居せる蛇を誘ひ出す、と云ふことであるが、支那では、瓢子で作つた一種の笛を吹き、その音で蛇を誘ひ集めるのである。日本の俗語に、夜、口笛を吹くと蛇が來る、と云ふことがある。これは支那の蛇捕の話から來た俗說かも知れぬ。或は日本でも昔は支那式によつて瓢子笛で蛇を捕へたものかも知れぬ。」右の方法で蛇を集めることは容易であるが(呼即易)、集めた蛇の中から入用なのを捕へ、その殘りの不用分を退散さ

せることは困難である（遣即難）。」とあります。

互換、』五分々々、負けず劣らず。

劫石、』無限に長き時間の喩へ。佛教に盤石劫、芥子劫の二說

あります。今は略す。

固來、』固を主に重く、來は賓に輕く。——

深處立、』立は、倒に對する立でなく、たちどころに、と意譯

すべし。

幾何般、』何のことだ、とケナス方に取る人もあり、——又、

幾人あるぞ、とホメル方に取る人もある。

太無端、』譯もなく、手輕に、謂れなしに。

提講。

此の頌の大意は、無名の一僧と烏臼和尙と、兩人の把住放行、

其の同得同失、其の提持平展、總てが賓主に落ちず回互に拘は

らざる底の美事さを吟じたものである。

呼即易、遣即難、』此の二句を平凡に云ふならば、人を傭ひ入

れることは至つて易い、されど一端傭ひ入れた其の人を出すと

云ふことは極めて難い。例せば蛇を捕ふる人が笛で蛇を呼び集

めることは容易であるが、集めた其の蛇を退散させると云ふこ

とは難事である、と同樣で、普通一般の人の到底なし得ざるこ

とである。——見よ本則の或僧と烏臼和尙の問答商量の如き

を。其の互換の機鋒と云ひ、其の把住放行と云ひ、其の寶劍の現前ぶりを子細に見來ると、殺中に活あり、活中に殺あり、彼にあるかとすれば此にあり、此にあるかとすれば彼にあり、賓に止らず、主に止らず、主にして忽ち賓、賓にして忽ち主、可謂、難兄難弟と。

劫石は如何に固しと雖も壞する時がある。滄海は如何に深しと雖も乾く事がないとも云へぬ。然るに兩人の勝敗優劣は何時果つべきと云ふ見込がたゝぬ。――或は永遠未解決のまゝであるかも知れぬ、と雪竇禪師は本則の兩人を托上された。――烏臼老烏臼老より以下結句の太無端に至るまで、雪竇禪師の意旨那邊にあるやを問はずして、自己の見識を以て判斷する人あり。云く、「流石の烏臼和尚も歳は爭はれぬものだ。聊か老耄、僧の云ふがまゝに棒を與へてやらなければよかつたに、老婆親切に棒を云ふがまゝに與へたは實に氣のきかぬこと甚しい。太無端とはこのことだ。」と。又或人は烏臼老、烏臼老と二度まで呼んで賞讃し、「斯くの如き人は多くの人の中に幾人あらう。乾坤只一人の境界。何を以て稱するか。次の句を見よ。與他杓柄太無端、こゝだ。自ら裸身になつて大敵を引受けたも同樣、僧の力を十分勘驗して をらるゝから斯くなされたのである。」と。一は烏臼老を托上し、一は烏臼老を抑下す。何れが是、何

れが非。是と云へば何れも是、非と云へば何れも非。――雪竇禪師の眞意は托上にあるか將亦抑下にあるか、衲の忖度し得る處にあらず。されど托上抑下何れかと云へば、衲は托上した方に共鳴する。何が故ぞ。與他杓柄太無端。――此の端なく杓柄を他に與ふる處こそ、烏臼の烏臼たる所以である。蓋し超人格者でなければ出來ぬ。――是を以て兩人の勝敗を論ずべからず。

（昭和十四年十二月二十三日講演）

第七十六則　丹霞喫飯也未

◎垂示

垂示云、細如米末、冷似氷霜、逼塞乾坤、離明絶暗、』低々處觀之有餘、高々處平之不足、把住放行、總在這裏許、』還有出身處也無、試擧看、』

讀方

垂示に云く、細なることは米末の如く、冷なることは氷霜に似たり。乾坤を逼塞して、明を離れ暗を絶す。』低々たる處之を觀るに餘有り、高々たる處之を平ぐるに足らず。把住、放

行、總て這裏の許に在り。」還た出身の處有りやいな。試みに
擧す看よ。」

字解。

細、冷、」此の四言二句は、十三則の垂示に冷處冷如氷雪、細處細如米末、とある其の文字を顚倒し、それを短縮したものである。其の意は眞如法界の體相を細と冷とを以て表現したのに外ならぬ。——

逼塞、」充滿又は瀰漫。眞如法界の體相そのものの限量洪大なることを云ふ。——

離明絕暗、」明中に暗あり、暗中に明あり。明、明にあらず、

暗、暗にあらざることを云つたものなり。

有餘、不足、」此の二句は人力を以て如何ともなし得ざるを云ふ。

這裏許、」此の許は、のみ又はなり、の意である、と聞く。或は然らん。這裏を宇宙にするのと自己にするのと二樣あり。それは其の人其の人の隨意。

出身處、」自由自在の活動を云ふ。或は大悟、大安心。——

提講。

宇宙の實體、法性の面目、强ひて其の細を語れば米末の如く、强ひて其の寒を云へば氷霜の如し。——されど細、その中に

無限大あり。寒、その中に無限暖あり。故に細は大小を超越したる細、寒は寒暖を超越したる寒、であることを知らざるべからず。然らざれば乾坤を逼塞して明を離れ暗を絶するとは云へぬ。此の意味を光明徧照十方世界と云ふ。法界に充滿する佛身を高と低とに比して云へば、低々たる處、之を觀るに餘あり、で其の低き根源を觀つくすことは出來ぬ。――高々たる處、之を平ぐるに足らず、で其の高き絶頂をこれ又見ることは出來ぬ。――果して然らば宇宙の實體、法性の面目は不可思議、――不可商量なるものか。否、然らず。把住放行、總て這裏にあり、で總て大悟底の人の掌中に歸す。知るべし眞箇大悟徹底せし人の一擧手、一投足、能く日月をして色を失せしめ、能く瓦礫をして光を放たしむ。――圜悟禪師、大衆に向つて曰く、諸君の中に、公衆の面前に出て把住放行を自由自在になし得る確信の者ありや。試みに本則を擧すから自己の悟處と兩々對照して見るべし。――

◎本則

擧、丹霞問僧、甚處來、僧云、山下來、霞云、喫飯了也未、僧云、喫飯了、霞云、將飯來與汝喫底人還具眼麽、僧無語、」長慶問保福、將飯與人喫報恩有分、爲什麽不具眼、福云、施者受者二俱瞎漢、長慶云、盡其機來還成瞎否、福云、道

我瞎得麽、』

讀方

擧す。丹霞、僧に問ふ、「甚の處より來る。」僧云く、「山下より來る。」霞云く、「喫飯了や、未だしや。」僧云く、「喫飯了。」霞云く、「飯を將ち來つて汝をして喫せしむる底の人還た眼を具するや。」僧無語。』長慶、保福に問ふ、「飯を將つて人をして喫せしむるは恩を報ずるに分有るなるに、什麽として眼を具せざるにや。」福云く、「施者受者二り俱に瞎漢なり。」長慶云く、「其の機を盡し來るも、還た瞎と成すや否や。」福云く、「我を瞎すと道ひ得るにや。」

字解。

丹霞、』天然禪師のことである。此の禪師は南陽の丹霞山に居られた。故に天然と云はずして丹霞と呼ぶ。―― 石頭希遷禪師の弟子。南泉普願禪師より九年先に生れ、韓退之と同年に死去なされたと云ふ。

天然禪師、青年時代に高等文官試驗のやうなものを受ける目的で長安(當時の首都)に上る途中、ある田舍旅館で、一禪僧と同宿しました。其の僧が、「君はどちらへ。」と尋ねた。天然は、「選官去。」(高等文官になりに行く。)と答へました。すると僧云く、「高等文官、それは俗の俗たるもの。寧ろ佛樣になつては。」

（選官何如選佛。）と。天然、感ずる處あり、選官を選佛に乗り換へ、其の僧の紹介で江西の馬祖道一の處に行き、更に南岳の石頭希遷の會下となり、六祖大師の如く三年の間、米搗の苦役に勤勞せられた、と云ふ。――此の人の逸話に、冬の寒き日に本堂の木佛を持出し、之を焚き、尻をあぶつた、と云ふことがある。又、文殊大士の像に馬のりに乗つた、と云ふ非凡の奇行もある。何れにせよ拔群の人であります。――

報恩有分」飯を持し來つて人に與へた其の人は自己の誠意を十分に盡した、と云ふべし。それが飯でなく金錢を以てでも、衣服を以てでも、又は菓子或は言語を以てでも、慈善たることは同一である。――

盡其機來」報恩の至誠、それを傾倒し寸毫も報酬を受くる念慮なきを云ふ。――

道我瞎」我をワカラズヤと云ふつもりか。我をあき盲と云ふのか。――

提講。

一人の雲水僧が或日丹霞（たんか）の天然禪師の處にやつて來た。すると丹霞禪師、「貴僧は何處から來られた。」と試みに一箭を放つた。――僧云く、「丹霞山の下の方からやつて參りました。」平凡の答であるが、正直だ。人は正直が何より。少し計りの見識を

鼻にかけ、四の五の小理窟を羅列するは愚の更に愚なるもの。』

――霞云く、「飯を喫したか、未だか。」第二箭を放つた。僧云く、「喫飯し了れり。頂戴致しました。」霞、此の僧の凡僧なることを見拔き、云く、「貴僧に飯を與へた其の人は眼があつたか。」

――僧無語。眞箇、凡僧の本性を露出した。――或人は云ふ、「若し問僧が眞實の作家であつたなら、丹霞禪師が、貴僧に飯を與へた其の人は眼があつたか、と云つた言下に禪床を掀倒して禪師に痛い思をさせてやつたらう。」と。或は然らん。

――衲は云ふ、「禮拜して退け。無語にまさること百千萬。」

――云ふ勿れ老婆言と。――

以上は丹霞禪師と無名僧の法戰。――以下は長慶と保福の商量。――

長慶、保福に問ふ、「將飯與人喫報恩有分、爲什麽不具眼。」(長慶は長慶慧稜のこと。保福は保福從展のこと。此の二人のことは第八則、第二十三則に記載しておきました。二人共に雪峰義存下である。)福云施者受者二俱瞎漢、と云ふ處へ井上君は左の如く云うて居らるゝ。「今の世の中に元來自ら爲すことなくして天下の遊民を以て自任し、大きな面をして人の飯櫃を狙つて歩くなんて、意氣地のないこと甚だしい。そんな天下の穀つぶしに飯を食はせる奴も奴だが、食はして貰ふ奴も奴だ。施者

も受者も大の眼なしだ。」と福に代つて喝破されたが、果して福は首諾するや。聊か疑問である。――施者も受者も眞箇の瞎漢にならざるべからず。長慶、保福、眞箇の瞎漢になるが主眼である。果して然らば、施す人も受くる人も、飯も共に瞎漢。是を敎家では三輪空寂と云ふ。之是の一大盲目こそ盡十方を平等に照破する光明なり。』――

長慶は、「盡其機來、還成瞎否。」と重ねて保福の手元をたしかめた。即ち「自己の最善を盡して誠心誠意、報恩謝德の心で慈善を行ふ、それをも君は眼なしと云ふのか。」――福云く、「道我瞎得麽。君は如何なる心行で種々樣々に理窟を並べ、拙僧まで世間の盲目扱ひにするつもりか。」同坑に異土なし。長慶、保福、蓋し一時の遊戯法戰ならんか。――

◎頌

盡機不成瞎、　按牛頭喫草、　四七二三諸祖師、　寶器持來成過咎、　過咎深無處尋、　天上人間同陸沉。』

讀方

機を盡さば瞎と成さず。牛頭を按じて草を喫せしむ。四七二三の諸祖師。寶器を持し來つて過咎を成せり。過咎深し、尋ぬるに處無し。天上人間同じく陸沉。』

字解。

最初の一句は、長慶の機を盡し來る、それと、保福の我を瞎と道ひ得んやと云ふ、それを合せたるもの。――

按、『牛頭』これは本則に喫飯と云ふことがある。それに因んで雪竇禪師の活機輪。』此の句の出所は大智度論と云ふことである。或人が澤山の供物を持つて墓場に行き、先祖の精靈に供へて居ると、一人の牛飼が居てその傍で牛の頭を草におしつけ、「そら食べろ、そら食べろ。」と云うて居る。（死せし牛の頭とも云ふ。）それを先祖に供養して居る人が見て牛飼に向つて云く、「牛が欲しくないのに、あなたのやうに草を喰へ喰へと云うても

牛は喰ひません。」すると牛飼が、「あなたも私のするやうな事をして居なさるではありませんか。靈豈供物を喫せんや。」と逆ねじを喰はせた、と云ふ寓話である。雪竇禪師の意を忖度するに、牛頭云々は長慶、保福の兩人、それに寓したもので、廣くは一般の修行者にも及んでをる。』時節因緣、熟、不熟がある。みだりに牛頭を按じて草を喫せしむるは勞して功なし。――

四七、二三、』四七、二十八、摩訶迦葉より達磨大師まで。――

二三、六、達磨大師から曹溪慧能大師まで。――

寶器、』これは釋迦が迦葉に傳へ、それから代々相承したる鉢と袈裟を云ふ。――例の以心傳底。――

過咎、』失策又は失敗。――無處尋、』澤山あること。云ひ換へれば、尋ね處のなきほど澤山ある、と云ふ意。――陸沉、』沈溺すべからざる處で沈溺すること。意外のこと。所謂疊の上の溺死と同樣。――

提講。

衲が管見に依れば、雪竇禪師は、丹霞と或僧との問答に重きをおかずして、長慶と保福の商量に力を入れて頌じられた、かと思ふ。されど骨子は丹霞と或僧との問答に胚胎すること無論である。

井上君は此の頌の新釋に左の如き高見を述べてをらるゝ。借用して初學の人の參考に供します。「世の中の人は、エライ人物に御馳走して食べさせることはエライことで、乞食などに御馳走して食べさせることは無益のやうに思つて居るやうであるが、これは大變な料簡ちがひである。元來、事物の眞價値は客觀的に存在するものではなく、主觀的に存在するのである。であるから、こちらさへ自己の最善を盡してするならば、先方が、大臣であれ、乞食であれ、旅僧であれ、神よりの報賞に値すべき眞價値はチヤンと其の感恩的行爲の中に存在するのであるから、低能兒同然の雲水坊主に飯を食はせたからとて、それで其の人に人物鑑定の眼がないとは云へぬ。牛頭を按じて草を

喫せしめるのも、これ偉大なる慈善事業である。」と。多少或は、と思ふ點がありますが、大體は賛成致します。――説き得て好し。』

機を盡して慈善をすれば、施者の眞意はそれで徹底。瞎、不瞎は元より問ふ處に非ず。受者も亦然り。機を盡して拜受すれば、飯の好悪は由來論ずるにたらず。之是の仔細を長慶、保福、兩人が自己の修行底に轉用して商量されたものならん。――

雪竇禪師、二句目に、按牛頭喫草、と唱へられた其の眞意は那邊にあるか。雪竇禪師にあらざれば知る能はず。例に依り衲の管見を下せば、無駄事なりと云ふ意ならん。「飯を與へた。

飯を受けた。飯を受くる人に眼がありしか。飯を與へし人に眼がありしか。」なぞとかれこれ推し問答は、要するに死牛頭に草を推しつけると同樣、實に無駄無駄。無駄も入念の無駄。――推し賣も物にこそよれ、悟の推し賣は蓋し害あつて益なし。』諸君既に知るならん。四七二三の諸祖師が寶器を持し來りしことを。――寶器を持し來りし諸祖師の眞意は爭論を停止せんがためなり。安心を得せしめんがためなり。然るに其の寶器が、豈圖らんや還つて過咎とならんとは。――過咎深。――丹霞禪師、――問僧、――長慶、――保福、――何れも何れも牛頭を按じて草を喫せしむる底。――四七二三の諸祖が泣

くぞ。――寶器が怒るぞ。――愧を知れ。――自己を顧みよ。――末世の今日、愧を知る漢ありや。自己を顧みる人ありや。――無處尋、――何れを見ても愧を知らざる漢のみ。――どこを尋ねても自己を顧みる人あるなし。無慚愧、――無自覺、――之是の漢は天下に充塞して居る。故に敢へて雪竇禪師は云ふ、「天上人間同陸沉。」と。――人を導く人が還つて人を迷はす。否、人を迷はす僧のみにて、人を導く僧なきを如何せん。――右は諸説の一なり。

（昭和十五年一月二十七日講演）

407
33

昭和十五年五月二十七日印刷
昭和十五年六月　三　日發行

著作兼發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終